

# ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』における健康概念について<sup>1)</sup>

北 夏子

1、はじめに

アンリ・ベルクソン (Henri Bergson, 1859-1941) は、『道徳と宗教の二源泉』 (*Les Deux sources de la morale et de la religion*, 1932<sup>2)</sup>、以下『二源泉』と略記) の中で、真の神秘家と呼ばれる人々が何よりも行動する人々であることを次のように述べている。

「真の神秘家は、彼らを満たす流れに単に自らを開く。彼らは、自分の内に自分自身よりも良いものを感じているので、自分自身を信じ、偉大な行動人として自らを現わし、神秘主義は見神体験や恍惚や忘我に過ぎないとみなす人々を驚かせる」 (101-2/1059)。

「これ (＝完全な神秘主義) は、行動であり、創造であり、愛でなくてはならない」 (238/1166、括弧内引用者)。

「偉大な神秘家は (中略) 男性であれ女性であれ、一般に行動の人であり、高次の良識 (un bon sens supérieur) の持主だった」 (259/1183<sup>3)</sup>、中略引用者)。

ベルクソンによれば真の神秘家と呼ばれる人々には行動が伴っている。

わたしたちは神秘家に憧れ神秘家になりたいと思うことがあるかもしれない。というのは、神秘家は真の自由を体現している人々であり彼らは人類における最も卓抜した生き方をしている人々であると考えられるからである。わたしたちがこの地上でこの生において最善で最上の生き方を実現したいと考えることは、わたしたち各々にとって不自然なことではない。

ところで、ここで素朴な疑問を提示したい。神秘家が何よりも行動の人であるならば、身体に障害を持つ人々や病気を持つ人々といった、行動を制限されている人々は、人類にお

ける理想を実現する力を奪われた人々なのか。あるいは先天的に障害を持つている人々は先天的に理想を実現する資格を奪われていると宣告された人々なのか。ベルクソンの自由論が自由行為論であり、自由を実現する神秘家を行動する人々であると定義づけていることは、わたしたちにこのような疑問を抱かせる。

この素朴な疑問に対して、わたしたちはさまざまな仕方でも答えることができるだろう。例えば、ベルクソンの「自由」とは何か、という問いを明らかにするなかで答えることもできるだろうし、自由な「行為」というときの「行為」とは何か、という問いをたてて答えることもできるだろう。本稿では、ベルクソンの『二源泉』のなかで示される「健康」と「病氣」の概念構造に注目するという方法でこの問いに一つの答えを与えようと思う。というのも、真の神秘家は行動する人々であると呼ばれているとともに、優れて健康な人々であるとも呼ばれる人々であり、自由な人々とそうではない人々という構図を、健康な人々と病氣の人々という構図に置き換えて、考察することができるからである。ベルクソンは次のように述べる。

「それでも、しっかりと安定し、例外的な、知性的な健康 (santé intellectuelle) があり、それは容易に見分けら

れるものである。この健康は、行動を好むこと、状況に適応し、再適応する能力、順応性に付随する揺るぎなき、可能と不可能を預言する識別力、複雑なことに打ち勝つ単純性の精神、つまり、高次の良識によって明らかになる。これは、まさしく、わたしたちが話している神秘家たちに見出すことではないか」(241-2/1169)。

「健康」と「病氣」は「自由」と「不自由」の単なる言い換えで、一方を否定すれば他方になるという関係でしかないのか。それとも、ベルクソンが神秘家を健康な人々であると述べるとき、そこにはこの関係を示そうとするのとは別の意図があるのだろうか。ベルクソンが神秘家を健康な人々であることと述べる意図は何か。本稿はこの問いを明らかにすることで、障害や病氣を持つ人々が自由を奪われた人々であるのか否かという疑問に答えることを目的とする。

2、健康と病氣の関係の変遷——身体から社会・行為へ  
本稿は特に『二源泉』における健康概念を問題とする。ところで、『二源泉』の第二章には次のような箇所がある。

「社会から孤絶したり、社会のつとめ (état) に充分に参加しないでいると、人間は「蜂の巣から離れた蜂に」

恐らく似ている病気で苦しむが、それは現在までほとんど研究されてきていない、わたしたちが倦怠 (ennui) と呼んでいる病気である。孤独が長引くと、たとえば禁錮刑においてのように、特徴のある精神障害がはつきり現れる (109/1064、角括弧内引用者)。

『物質と記憶』 (*Matière et mémoire*, 1896) のなかで、ベルクソンが「失語症」の研究を通して、冒されない精神をわたしたちに示して見せたことを記憶している者なら、この箇所を讀んで、こう思うかもしれない。精神は冒されないはずではなかったのか？ だから、わたしたちは、ベルクソンにおいて「二源泉」に至るまでに描かれてきた「健康」と「病気」の構図を辿らなければならないだろう。わたしたちはまず『物質と記憶』における代表的な病気である「失語症」を論じる。次いで、「現在の回想と誤った再認」 (*Le Souvenir du présent et la fausse reconnaissance*, 1908、以下「再認論文」) と略記) における「健康」と「病気」の関係を論じる。それによって、わたしたちはこれらの諸論考から導き出される結論と課題を明らかにし、神秘家が健康であると呼ばれる所以を明らかにするための土台をつくることにする。

2-1、身体において論じられる「病気」——『物質と記憶』  
確かにベルクソンは『物質と記憶』でどのような身体的障害によっても冒されることのない精神の領域を確保していると思われる。ベルクソンは次のように述べ、精神の領域における記憶の、物質の領域における身体からの独立性を示している。

「すべての事実とすべての類推は、脳に、諸感覚と諸運動とのあいだの媒介だけを見ようとする理論に有利であり、この理論によると、諸感覚と諸運動の全体は、心的生の尖端、数々の出来事の織物のなかに絶えず差し込まれた尖端であり、また、こうして身体には、記憶を現実へと方向づけ、記憶を現在と結び付けるといふ唯一の機能を与え、この記憶そのものは物質から絶対的に独立しているとみなされるだろう」 (198/315)。

『物質と記憶』で論じられる身体的障害とは「失語症」である。「失語症 (aphasie)」は数々の身体疾患のなかでも特別なものであると考えられている。ベルクソンは次のように述べている。

「身体は想起を脳の装置の形で保存するとの考え、記憶

の喪失と減少はこれらの機構の多かれ少なかれ完全な破壊からなり、反対に記憶の高揚と幻覚はそれらの活動の過剰さからなるという考えは、したがって、推論によっても諸事実によっても確証されない。真理は、観察が一眼するとこの見解を示唆するように思われるケースがただ一つあるということである。わたしたちは失語症について、より一般的には、聴覚あるいは視覚の再認の障害について話したい。それは、病気を脳の特定の回(circumvolution)のなかの一定の部位に帰することができる唯一のケースである。しかし、それは、正確に言えば、ある特定の想起の機械的で決定的になる引き離しではなく、むしろ、関係する記憶の全体の漸進的で機能的な衰弱が目撃されるケースでもある」(196-7/314-5)。

ベルクソンが述べるところによると「失語症」は「聴覚あるいは視覚の再認の障害」である。この障害は「病気を脳の特定の回の中の一定の部位に帰することができる唯一のケース」であるとされる。この障害が問題となるのは、この障害においてのみ身体の特定の個所が記憶障害の病因であると判断できると一般的には考えられているからであろう。

再認とはわたしたちが過去を現在のなかで把握し直す具體的な行為のことである(96/235)。その把握し直す行為が

聴覚や視覚といった感覚機能を介して行われる際に上手くいかない場合があり、その原因は脳の特定の部位に求めることができるという研究報告がある。その報告によれば、脳の特定の場所が傷つくことによつてそれに対応する特定の障害が起るとされている。その障害は記憶を消失させる障害であるとされる。しかしベルクソンはそういつた特定の神経系がダメージを被ることでは、想起は破壊されないことを次のように述べている。

「時間に沿つて並べられた数々の想起から、それらの生まれつつある行動もしくは可能な行動を描く諸運動へと、感じ取れないほど徐々に移行がなされる。脳の数々の損傷はこれらの運動を傷つけることはできるが、これらの想起を損なうことはできない」(83/225)。

ベルクソンが失語症の研究によつて報告するところによれば、わたしたちの身体が冒される(損なわれる)ことはあるとしても、わたしたちの精神は冒される(損なわれる)ことはない。損傷を巡る議論を用いて身体と精神との関係について述べれば、身体を傷つける(あるいは冒す)ことによつて精神に傷をつける(あるいは冒す)ことはできないということになる<sup>3)</sup>。

对身体という関係においては、精神が病む場面を捉えることはできない。だから、『物質と記憶』の議論に従う限り、わたしたちは傷つけられない精神というものを想定することができたのである。このことはしかし次のことを示唆するものでもあるだろう。それはすなわち、精神が病むことがあるとすればそれは身体の損傷との関連ではなく別のものとの関連においてであるということである。その別のものとは、先に述べたように『二源泉』第二章に述べられているところに従えば、「社会」であると考えられる。

それでは、わたしたちは身体と関連づけられる限りで再認の障害を報告している著作から、精神の領域に限定し、その健康状態と病気の状態との関係のなかで再認の障害を考察している論文へと移ることにしよう。

## 2-1-2、「再認論文」における「健康」と「病気」

ベルクソンは「再認論文」の中で「病気」を二つのタイプに分けて考察している。

一つ目のタイプは正常な生活の貧困化によるもの(125/908)である。知覚消失、健忘症、失語症、麻痺などがそのタイプに分類される。「感覚や回想や運動の停止」(125/909)がその特徴であり、その病気を捉えるためにはそれがわたしたちから何を取り去るかを捉えることが必要になる(*Ibid.*)。つ

まりその病気にかかることによって意識から消えたもの(例えば知覚や記憶、言葉や感覚など)があるとすれば、その「不在(*absence*)」(*Ibid.*)が病気をあらわす。

一つ目のタイプは、正常な生活に加わってそれを減退させずに豊かにするように見えるもの(*Ibid.*)である。具体的にはうわごと、幻覚、固定観念、心的錯乱の大部分の徴候、心理的な異常性・特異性などである。これらはわたしたちに何をもたらすかによって捉えられる病気である。そこに見られる「現存(*presence*)」(*Ibid.*)が病気をあらわすと考えられる。

一つ目のタイプについては、これを病気の定義としてすぐさま受け入れることができるとしても、二つ目のタイプについては、受け入れることは困難である。というのも、「精神の領域において病気や退化が何かをつくり出す」ことに対する違和感があるからである(*Ibid.*)。何ものかの「現存」によってある種の病気が定義されるとしても、そこには、実は内面の空虚や正常な現象が不足しているということがあってはならないだろうか。

ベルクソンは「病気は減退である」(*la maladie est une diminution*)」(*Ibid.*)という人々の意見があると述べている。病気が減退であって何かを創造するものでないとすれば、わたしたちは創造するように見える二つ目のタイプにおいては、「数(*nombre*)」ではなく「堅や(*solide*)」「重や(*poids*)」

という点で減退するものがあるのではないか (126/909) と見通しを立てることができる。ベルクソンは、意識における「堅さ」や「重さ」の減退によって、「どの心理状態も消えないが、すべての心理状態がおかされて、みな重り (weight) を失う、すなわち、現実の中へはいりこむ力、しみこむ力を失う」(126/909-910) と述べている。ここでは、この部分だと指して指摘することができない全体的な衰弱が見られることを「堅さ」や「重さ」の減退と呼んでいると思われる。この心理状態の低下とは、「生活への注意 (attention à la vie)」が減退するということであると述べられる (126/910)。

ベルクソンによれば、病気は何かを生み出す力を持たない。病気の原因は、正常な状態では他のメカニズムが十分な結果を生ずることを妨げていたあるメカニズムが、弛緩したか停止したかではないと考えられ、心理学が探究すべきことは、いかにしてある現象が病人に生じるかを説明することではなく、なぜその現象が健康な人には認められないのかを説明することになる (127/910-1)。病気を生み出す原因の一端は、「正常な状態」や「健康な人」において見られるような、わたしたちの「動的平衡」「意識の躍動」を生じさせているあるメカニズムそのものに求められると考えられる。しかし、正常な状態の意識の躍動はそのままでは捉えることが出来ないとベルクソンは述べている (152/930)。病気に伴う現象を

突き合わせることによって「健康」を考察することが可能になるので、「病気」はわたしたちに正常な状態におけるメカニズムがどのようなものであるか明らかにさせるものである。わたしたちは「再認論文」の中で考えられている「健康」と「病気」の関係について次のように述べることができる。「病気」は、そもそも健康な人のうちにも存在するあるメカニズムとして用意されており、「健康」について明らかにしようとするならば、「病気」を解明するという手続きを取らなければならぬ。

## 2-13、再認の障害を扱った『物質と記憶』と「再認論文」の帰結と課題

『物質と記憶』における失語症研究と「再認論文」における精神の領域における「健康」と「病気」の状態の関係についての考察によって以下の事柄が導き出されると思われる。

对身体という関連ではわたしたちは精神が病を負う場面を捉えることはできない。むしろこの議論では精神の領域における傷つけられない記憶が明らかにされる。しかし、精神の領域において、ある特定の状態の減退を病気と見る人々の意見が適用される場面があるとすれば、正常な生活の貧困化や生活への注意が減退している状態がそれにあたる。精神の領域で考えられる「健康」と「病気」の関係は、「健康」な人

のうちにも存在するあるメカニズムのあるはたらき方を「病氣」と呼ぶというものであり、「病氣」は「健康」のうちですでに準備されているというものであり、また、「病氣」を明らかにすることによってのみ「健康」を明らかにすることができるといふものである。

ここでわたしたちはこれらの再認の障害を扱った諸論者がとり残している課題を指摘することができる。『物質と記憶』では身体との関係においては精神が病む場面を説明できないことが分かった。「再認論文」では精神の領域における「健康」と「病氣」の関係が分かった。しかし、わたしたちには今のところまだ精神の「健康」と「病氣」という区別可能な諸状態がなぜ生み出されるかについて分かっていない。すなわちわたしたちはまさしくここで『二源泉』における社会との関係で生み出される精神病についてのベルクソンの考察を追わなければならないのである。

### 3、「二源泉」における「健康」と「病氣」について

ベルクソンは社会と健康状態の関係について実例を用いて説明する。膜肢類に分類される蜂は、巢のなかで、一定の社会生活を営んでいると考えられる(108/9/106<sup>4</sup>)。蜂と人間は社会を構成している点で類似する。社会的成員の間に結び付きがあるということが、社会活動に参加することができないことによる

ある病的状態が存するということから翻って理解されるという。ベルクソンは、蜂だけでなく人間においてもそのような病氣がみられると述べている。人間の「病氣」とは「倦怠(ennuï)」と呼ばれている精神的な危機である(109/106<sup>4</sup>)。

ベルクソンが指摘するのは、精神の領域における病氣が社会的な関わりの中で生み出されているという事実である。「健康」と「病氣」は「社会」と関わりを持つものとして考えられていることが認められる。

#### 3-1、精神の病についての報告

社会活動に参加できないことで陥る「倦怠」とはどのような病氣だろうか。わたしたちはここで、ベルクソンも『二源泉』において触れているピエール・ジャネ(Pierre Janet, 1859-1947)による『不安から脱我まで』(De l'angoisse à l'extase : études sur les croyances et les sentiments, 1926.)の中の「倦怠(Le sentiment de l'ennui)」にこの観察報告を見ることで、一定の理解を持つておきたい。

ジャネによるこの報告は、神秘経験の体験者であるという一人の精神病患者である女性「マドレーヌ」についての詳細な報告を含んでいる。彼女自身の表現によれば、倦怠という感情は、次のようなものである。

「慰めも励ましもなく、自分で慰めること、使命を果たすことぐらいしか考えられず、昨夜などは物憂さ (ennui mortel) を過ごしました。何とも言えない不安 (angoisse) が心に染みこんできて、その悲しみがだんだんとわたしを包み込み、やりすごすこともできず苦しかったのです。動物のようになつて、考えることも動くこともできないようでした。本を読もう、裁縫をしよう、絵を描いてみようとなりましたが、うまくゆかなかつたのです。祈ることができたのも、ただ受け身的に神さまのご指示に従っているだけで……、神さまは動物のようになつてゐるわたしを許してくださいましたが……。酷かつた頭痛も治まり、ただ倦怠 (ennui) だけが灰色に単調につづいていたのです」。

外的な様子はどうか。マドレーヌの様子をジャネは次のように報告している。

「行ったり来たりするのでもなく、また何らかの活動を始めるのでもなく、ただ椅子に座つてじつとしてゐる (immobile)。顔には、落ち込んだ深い悲しみの表情が浮かんでゐる。恍惚期の無動とは違つて、椅子に座つてゐるが少しは動きも見られる。しかし両腕はだらつとさせ、意

図的に動く気配はない。話しかけても二言三言悲しげに返事が返つてくるだけで、いつものおしやべりはなく、訴えることも質問してゐることもない」。

本人の証言とジャネの報告によれば、内面的には悲しみの感情が感じられており、動かない、あるいは、動けないというのが、「倦怠」である。この状態にあつては、話すという行為もほとんど見られない。ペルクソンは、話すという能力が社会の存在を表すものであることを次のように述べてゐる。

「社会的感覚 (le sens social) と呼んでもよい良識 (le bon sens) は、話す能力のように、正常な人間に生得のもの (innée) であつて、話す能力もまた、社会の存在を含有しており、それは良識に劣らず、個々の有機体に描かれてゐるものなのである」(110/1065)。

話す能力が社会の存在を含有しているのであれば、話す能力があるにも関わらずそれを用いない状態というのは、社会性が十分には発揮されていない状態であるとみなすことができる。ある程度の「無動」の状態として現れるいわば行為の病は、社会性が発揮されていないという意味で社会的な病であるとみなすことができる。ところで、ジャネによる具体的な報告からも精

神の病は行為の病であることが確認された。したがってわたしたちは改めて精神の病は社会的な病であると認めることができると。

### 3-1-2、精神病患者と神秘家との類似と相違

先にわたしたちは社会活動に参加しないことが精神障害と関連付けられることを述べた。精神障害とは例えば倦怠と呼ばれるような状態であるが、無動状態がみられるという点において、他にも脱我状態なども異常な状態であり、精神障害の一種であると考えられる。ところで、脱我、恍惚等ある種の異常状態は、ベルクソンが自由の体現者であるとする神秘家にも見られる現象である。そこで、神秘家を精神患者ではないとみなすのであれば、なぜそのようにみなすのか明らかにしなければならぬだろう。ベルクソンは神秘家を精神患者とどのように区別するのか。

神秘家は精神患者であるどころかむしろ、わたしたちのうちでも勝って「健康」なものであるとベルクソンは述べる(241-2/1169)。ベルクソンは「精神病患者」と対照させて神秘家の知的健康について述べていると考えられる。とすれば、ベルクソンが述べる健康とは、身体的に障害を持たない状態のことではなく、「精神的」健康だと思われる。神秘家の「健康」な状態において見られるものが、精神病患者における「病

気」の状態のうちに見られるものと似ていたとしても、結局は、各々は区別されるべきものである。とされる(242/1169)。神秘家が経験する異常状態は病的状態と類似しており、その類似性は、神秘家自身をも自らの体験が病的状態であるかもしれないと戒めさせるほどのものであった。

「しかしながら、忘我や見神や恍惚が異常状態であることは明白であり、異常状態と病的な状態を区別することが難しいことも明らかである。もつとも、このようなことは、偉大な神秘家たち自身の意見であった。彼らはまさに、単に幻覚にすぎないかもしれない見神体験に対して、弟子たちに警戒を促している人たちだった。また彼らが見神体験を経験していた場合には、彼らは一般的には二次的な重要性しかそれに与えなかった。それは途上の出来事であった」(242/1169)。

ただし、異常状態が見られたとしても、その異常状態は神秘家においては「途上の出来事」でしかない。越えられるべき途中の通過地点である。魂が掻き乱されるときに現れる心像や情動は、「高次な平衡 (équilibre supérieur)」(243/1170) を目指して、組織的な編成替えが行われている証拠である (Ibid.)。神経錯乱が神秘主義にもなうこと

があり得るが、その錯乱は神秘精神には関わりのないことである。と述べられる (Ibid.)。激動を越えて神秘家は神秘家になり、行動の人になる。

精神病者と神秘家との類似点は、一時的にせよ恒常的にせよ、倦怠 (ennui) といった状態を経験することである。相違点は、行動が実現されているか否かということである。わたしたちはここで精神を行動させるものと読み替え、行動が実現されていればそこに精神の健康がみられると結論付けることもできると思われる。ただし、行動であるからには、行動を実現させる際には、何らかの多様性が存在すると考えられる。ここには精神の領域において「健康」と「病氣」という区別可能な諸状態が生み出されるひとつの背景があるものと思われる。

3-3、神秘家とわたしたち——行為の次元が開くもの  
ところで、ベルクソンは無視することができないものとして次の意見を挙げている。

「しかし、考慮に入れないことができない別の一連の反論がある。この偉大な神秘家たちの経験は個人的で、例外的 (exceptionnel) であり、その経験は、大多数の人々には確かめられ得ないものであり、したがって、科学の

実験に比較し得るものではなく、問題を解くことは出来るものではない、とわたしたちは実際主張する」(259-260/1183)。

この議論をベルクソンの次のことばに照らし合わせると、例外的である限りにおいて神秘家は「病氣」であるということになるだろう。

「比較的稀で例外的なもの (exceptionnel)」、たとえば病気を異常状態とみなすことは、わたしたちの精神の習慣に合致している」(26/1001)。

しかも、大多数の人々と区別される例外であるとすれば、強度の病者であるとも言えるのではないか。神秘家を例外的なものであるとすれば、わたしたちにはまだ彼らを「病氣」であると定義する余地があるではないか。しかし、彼らは「行動の人」であるという意味で例外なのである。これまでの考察により、わたしたちは、例外的であつてもそこに行為が実現されているのであれば、彼らを病者であるとみなすことは難しい、と言える。以下に述べるが、彼らの行為には、わたしたちに彼らを排除させるような仕組み自体を排除する性格があり、この性格がわたしたちと彼らとの関係に寄与していると思われるのである。

ベルクソンには少なくとも彼らの「行為」は、<sup>二</sup>模範となることと模倣することを許容し、<sup>三</sup>響かせることとこだますることを許容し、<sup>四</sup>証言することと検証することを許容することを述べている。

### 3-3-1、模範となることと模倣すること

神秘家が体験することは、言葉だけで伝えられるものではなく、彼ら自身が模範となることによって伝えられるような種類の事柄である。

「彼（＝偉大な神秘家）は、太陽がその光を放たずにはいられないのと同様に、もはや真理を広めずにはいられない。ただし、彼が真理を広めるのは、もはや単なる話によるのではない」（247/1173、括弧内引用者）。

「偉大な神秘家にとって問題なのは、自ら模範（example）を示すことから始めて、人類を根本的に変えることである」（253/1178）。

さらには、彼ら自身もまた模倣するものとして捉えることができるかと述べられる。

「もしも偉大な神秘家たちがわたしたちのまさに描いたような人々であるならば、彼らは、不完全であっても、完全に福音のキリストがそれであったものの、オリジナルな模倣者（imitators）であり継承者であることが分かる、とだけ言っておこう」（254/1179）。

わたしたちは、ベルクソンがここで言葉によって伝達されるものとは別の伝達の仕方を可能にするものとして「行為」を描いていると理解することができる。

### 3-3-2、響かせることとこだますること

神秘経験をしたことのないウィリアム・ジェイムズ（William James, 1842-1910）によれば、彼であっても神秘経験をした人の話を聞けば、自分のうちに「こだまするもの（echo）」を感じたという（260-1/1184）。ベルクソンはジェイムズのこの意見を採用し、彼も権利上は神秘経験をしていると考えても差し支えないという見解を支持しているものと思われる。神秘家の行為は、神秘家でないものにも「こだま」を経験させるといふ効果を生み出す。これは「行為」によって引き起こされる心理的現象であると考えられる。

### 3-3-3、証言することと検証すること

また、神秘家らの間には、最終的に神と合一する前に通

る中間段階はそれぞれ相互に一致するという現象が存在する(261/184)。この一致は、表面上の一致ではなく、福音書から影響を受けたことによる一致でもなく、神学教育によって引き起こされた一致でもない。それは深部での一致であり、直観が同一の証拠だと考えるべきものである。この一致は、神秘家たちが霊的に交わっていると信じている、ある「存在者」の実存性によって説明され得るものと考えられるものとして書かれている。ベルクソンは哲学が神秘家という現象を研究対象にすることができるとして、学としての科学がただ一人の開拓者によって始まることを述べ、それが学としてなりたつということには権利上は複数の報告を可能にする面があったことを述べている(260/183)。科学的知識における客観的事実は、ある同一の現象・対象に対する人々の複数の意見・証言によって形づくられるものと考えられている。証言の重要性が語られるのはこのことを示す意図があるものと思われる。神秘家が申し合わせることなくある同一の対象に辿り着いているのだとすれば、この現象には科学がある対象を扱えるのと同じ意味で客観性と検証可能性があると考えられているものと思われる。

### 3-3-4、行為の次元が開くもの

すなわち、わたしたちと神秘家との間には「行為」を介した

少なくとも三つの関係がある。「行為」がこれらの複数の側面を許容する性格をもつために、わたしたちは神秘家と共通する領域を保持することができる。この領域の存在が、わたしたちが神秘家を社会から排除するという構造そのものを排除し、神秘家という現象を病気であるものではなく、すぐれて健康なものとしてみなすことの一助となっていると考えられる。

上にあげた三つの関係は、わたしたちと神秘家との間のつながりを示すものであるだけではない。神秘家とわたしたちとの間のこれらの関係は、神秘家の「招き (appel)」(102/160) にわたしたちが応じ、神秘家の方向へとひきつけられる仕方を示すものでもある。神秘家とわたしたちの間には、互いに排除し合うというような関係があるのではない。模倣させ、こだませ、検証させることのうちには、わたしたちを魅了しつつそうさせるといふ関係もある。すなわち、ここには、彼らがあたかも引力であり、彼らをも突き通す、一定の方向性をもつ「力」<sup>⑧</sup>によって、わたしたちが引き上げられているかのような関係がある。『二源泉』における「健康」と「病氣」の概念構造によって、わたしたちには、このような方向性が示されていると考えられる。

### 4、おわりに

これまでの議論をまとめよう。精神は対身体という関係においては冒されないものである。言い換えるならば、身体

の損傷によって精神は損傷を受けず、精神の病は身体の病によつては説明することができない。精神の領域に移ると、精神の健康状態の中に既に精神を病に陥らせる要因が準備されている。そして健康状態について知ろうとするならば、わたしたちは病的状態をまず知らなければならぬ。また、精神の領域における「健康」と「病氣」は「社会」との関わりの中で理解することができるといふのも、社会性と行為とは切り離すことができない関係にあるからである。「神秘家」が「健康」の事例としてみなされるのは、「神秘家」は社会性を失っている人々としては考えられないからであり、神秘家を病者だとみなす構造は「行為」が社会性と関連づけられている限り排除されると考えられる。

以上のことから、次のようなことが考えられる。「行為」が確保するのは、わたしたちの社会性であり、わたしたちと神秘家との間のつながりである。「行為」が尊重されるのは、そこにおいて両者の間に複数の通路が開かれているからだと考えられる。さらに、神秘家が絶対的に健康なものとして描かれることによつて、「病氣」が「健康」のうちにあるように、神秘家ではないという意味で病氣であるわたしたちが神秘家という現象のうちにあるという構造も浮かび上がらせる。ベルクソンによつて描かれる神秘家は、わたしたちに模倣させる模範であり、わたしたちの内に反響させる声をもつ人々で

あり、わたしたちにそれを検証することを許す証言する人々である。

神秘家は圧力としてではなく魅力として描かれている。ここには、彼らやわたしたちをも突き通す、ある「力」の方向性が見られると思われ。ベルクソンにおける「健康」と「病氣」の概念構造によつて意図されているのは、わたしたちの内面で働いている、一定の方向性を持つ「力」がある、ということである。

さらに、わたしたちには次のようなことが考えられる。ベルクソンにおける理想としての自由が行為であることは、身体的であつても精神的であつても、病氣や障害を持つている人々がこの理想から排除されていることを示すものではない。そうではなく、それはむしろ、複数の通路を介してわたしたちが自由と結び付けられており、自由へと開かれていることを示すものである。また、わたしたちのうちには、自由行為を象徴とする高次の健康へと引き上げられているという方向性があることも示すものである。そして、自由行為の体現者は、この方向性をこそ体現していると考えられる。とすれば、わたしたちにおいて重要なのは、わたしたちを条件づけている「力」を知ることであり、すでにその「力」の内にあるということを知ることであると思われる。だから、わたしたちは、病者や障害者が自由を奪われた人々であるのか否

かという問いには、否と答えるべきであり、さらには、彼らは・わたしたちはすでに自由の内にあると答えるべきであるように思われる。

注

- (1) 本論文は、松下幸之助記念財団の助成によりなされた研究の一端である。記して謝意を表したい。
- (2) ヘルクソンの著作の引用にあたっては、頁数を括弧内に示し、前に *Quadrige* 版の単刊書の頁数を示し、後に著作集 (*Oeuvres*, 6<sup>e</sup> édition, Paris: P.U.F., 2001.) の頁数を示す。ただし、両著作からの同頁の引用が連続した場合に限り (*Ibid.*) の表記を用いる。また、邦訳するに際しては、既存の邦訳を参考にしながら必要に応じて訳語を変更した。
- (3) この場合の傷とは単に物理的な意味での傷である。
- (4) Pierre Janet, *De l'angoisse : études sur les croyances et les sentiments*, VOL. 1, Paris, Librairie Félix Alcan, 1926, pp. 159-161. なお邦訳に関しては次の邦訳書を参照した。『エール・ジャンネ』症例マドレーヌ 苦悶から恍惚へ』松本雅彦訳、みすず書房、2007年。
- (5) *Ibid.*, pp.159-160.
- (6) *Ibid.*, p.160.
- (7) ヴィタール氏によれば、知性的 (intellectuel) な健康とは、心理的な (psychologique) な健康と言い換え可能である。Jean-Christophe Goddard, *Exception mystique et santé moyenne de l'esprit dans Les Deux sources de la morale et de la religion, in Annales bergsonniennes I.*

*Bergson dans le siècle*, Frédéric Worms(éd.), Paris, P.U.F., 2002, p. 228.

(8) 伊東氏は、神秘家自身が自らの体験が真正なものであるか判別することができず不安のうちにとどまりつつ行為に向かうところにこそ、神秘家の神秘家たるゆえんがあることをベルクソンは示していることを指摘している。以下を参照。伊東俊彦、「ベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』における神秘経験の意味」『哲学雑誌』123巻795号、有斐閣、2008年。

(9) ヘルクソンは『意識に直接与えられたものについての試論』(*Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889)で次のように述べている。「力(force)の観念は必然的決定の観念を排除(中略)わたしたちは意識の証言によってのみ力を認識し、意識は将来の行為の絶対的決定を肯定しないし、それを理解することさえない。つまり、これこそ経験がわたしたちに教えるすべてであり、もしわたしたちが経験に踏み留まるならば、わたしたちは自分を自由であると感ずると語り、理由の有無にかかわらず、力を一つの自由な自発性として知覚する」と語るだろう」(1623/142、中略引用者)。本稿で「力」ということで想定しているのは、この「力」である。

(きた・なつこ) 筑波大学大学院一貫制博士課程

人文社会科学研究所 哲学・思想専攻